

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成 29 年 2 月 27 日（第 26 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「いのちの授業」を終えて、先生も感想を書িয়েくれました。日々、接している生徒の「いのちの物語」を先生も改めて感じてくれました（その1）。

所長 小沢 浩

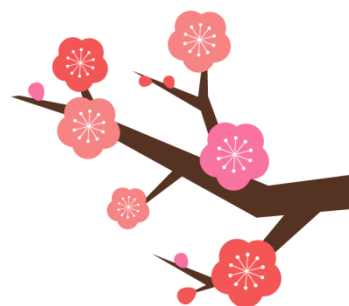
・12月の保護者面談で、今回の「いのちの授業」について、お願いしたところ、どの母親もこころよく引き受けてくださいました。むしろ、このような機会をつくってもらって感謝しているようにも感じられました。そして、授業の中の生徒の作文は、どれも素晴らしく、母親や父親の思いがひしひしと伝わってくる内容だったと思います。発表されたひとつひとつに、それぞれのドラマがあり、言葉では表しにくい何かが伝わってきました。そして、いままで、こどもに伝えたくても伝えられなかったものが、そこにあったように感じます。生徒も、改めて自分の存在や両親の存在、両親の思いを再認識できたことでしょう。



・生徒の作文の紹介は、感動的なものがあって、ホロリとさせられました。障害をもったお子さんがいるお母さんたちが「産んだ責任」を感じたり考えたりしなければならないのは、聞いていて、つらくて心が痛くなりました。助け合って生きていける社会のためにわたしたちができることは何なのか真剣に考える機会を与えていただいたと思います。

自分や友達がどのようにして生まれてきたか、どれだけ家族に幸せを与えたかどれだけ大切な存在であるのかを知ることができたので、自分のことも周囲の人たちのことも大切に考え接していかなければいけないということを改めて考えた生徒も多かったと思います。次の日の日記にはいのちの授業について書いていた生徒も多く、それぞれに強く印象に残った授業であったことがうかがえました。

・自分にも2人の子どもがいます。1人は先月に生まれました。出産にも立ち合わせていただきましたが、本当に感動しました。妻のがんばり、子どものがんばりに心を打たれ、涙がこぼれてきました。1人目のときにも思いましたが、健康で生まれてくれればそれだけで充分だという気持ちです。「無事に生まれたことが奇跡」という言葉、その通りだと思いました。障害をもって生まれてくるということに関しては妻とも話をしました。障害をもって前向きに生きている子ども、親はたくさんいます。とてもすばらしいことですし、尊敬します。自分にも障害をもった子どもが生まれたら、その子のために自分の人生をすべて捧げると思っています。しかし、障害をっていない子どもで生まれてほしいという気持ちと、障害がなくて安心したという気持ちが、素直な思いです。この部分については正直自分でもわかりません。どうして障害というものがあるのか、それがなければという気持ちです。神様は、試練を乗り越えられる



人にしか試練を与えないという言葉がありますが、子どもの障害については、僕はそうは思いません。なぐさめの言葉としか受け取れないのではないのでしょうか。自分の子どもが目の前にいて、自分に似ていて。どうしてこんなに似ているんだろう、どうしてこんなに成長するんだろうという気持ちにもなります。命ってむずかしいし考え出すとキリがないしよく分からないですね。ただ、自分の子どものためには何でもできると思えます。そして世界中の子どもたちが健康であってほしいと思います。子どもが生まれてからというもの子どもの亡くなるニュースを聞くたび胸が締めつけられます。本当にすべての子どもが健康であってほしい。

（奇跡がくれた宝物 小沢浩著
クリエイツかもがわ より）

